

第42年度（2026年度）ソフトウェア品質管理研究会 分科会紹介

「Why? でプロセスの本質を理解して最大限活用し、
VUCA の時代を“馬”のように駆け巡ろう！」

「“カタチ” だけなら、やらないほうがいいんじゃないですか？」

開発メンバーが委託先の方から指摘された言葉で、当メンバーは対応に悩んでいました。なぜ、このような指摘が生じたのでしょうか？

筆者が確認したところ、開発対象が限定的であるにもかかわらず、開発プロセスに定義されている全ての成果物の提出を求めていたためでした。つまり、開発プロセスの記載「How（手段）」を優先してしまい、委託先が不要ではないかと思う成果物まで求めてしまったのです。

本来なら、各成果物について「Why（なぜ必要か?）」を十分理解した上で、開発プロジェクトの特徴に応じて、必要か否かを判断すべきでした。

VUCA と呼ばれる現代では、開発プロジェクトへの要求やシステム構成等において、変動性・不確実性が高くなり、かつ複雑化・曖昧化が進む傾向にあります。その状況のもと、開発プロジェクトを成功させるためには、有限のリソースを最大限活用し、「物事の“本質”」を見極めた上で「やる・やらない」を判断し、優先度の高い業務に注力するとともに、無意味な業務は止めなければなりません。そのためには、開発プロセスの内容を十分理解し納得した上で、戦略的に最大限活用することが肝要ではないでしょうか。

私たち研究コース1（ソフトウェアプロセス評価・改善）では、特に開発プロセスの視点で、ソフトウェア開発現場の要求分析から試験、運用・保守までを対象に、現場密着型の課題とその解決策を探索する研究を進めています。

「プロセス、技術、人」をベースに、従来からのプロセスモデルや品質モデルだけにとらわれず、最近では生成 AI などの最新技術にも着目した研究活動を行っています。上述のような開発対象が小規模開発のケースや、逆に大規模開発のケースについての、最適な開発プロセスの研究も行っています。

品質を向上させるだけでなく、QCD のバランスを良くすることや楽しく開発することも目指して、課題解決策を研究しています。

研究会の主役は研究員の皆さんです。研究員それぞれが問題を持ち寄り、その問題の本質や原因を議論し合って課題設定し、課題解決策の仮説を研究テーマにします。

研究テーマの有効性（課題解決につながるか否か）を実験、評価し、最終的に論文化し自分の職場に持ち帰っていただきます。

研究活動は以下の講師陣でサポートします。皆さんの豊富な、知識、経験とアイデアで、品質やプロセスの悩みや課題をたくさん議論し、相互研鑽できることを楽しみにしています！

◆主査：田中 桂三（オムロン株式会社） ※本原稿筆者

オムロンのソフトウェア開発事業における品質保証、開発プロセス作成、開発プロジェクトリーダー、およびこの日本科学技術連盟のSQiP研究会における長年の活動を通じて、ソフトウェア開発の品質保証とプロセスの課題解決を継続的に推進中。主な資格として、技術士（情報工学部門）、JSTQB AdvancedLevel テストマネージャーを取得。

◆副主査：白井 保隆（株式会社東芝）

東芝グループのコーポレート SEPG を中心に、カンパニーSEPG や技術企画など様々な立場で長年、ソフトウェア開発の品質保証、プロセス改善を推進。また、日本 SPI コンソーシアム（JASPIC）にて理事を担当。

今年の干支は「午（馬）」。躍動、成長、勝負運を象徴するもので、かつ目標に向かって情熱的、行動的に突き進む力を与えてくれると言われています。

物事の本質を見極めた上でプロセスをうまく活用して、VUCA の時代を「馬」のように駆け巡り、大きく成功・成長していきましょう！！